HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	方法論的個人主義の行方 3 ： 形而上学と実用書
著者	犬飼，裕一
引用	北海学園大学学園論集，138：1-24
発行日	2008-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

方法論的個人主義の行方　3

形而上学と実用書

犬飼裕一

「実際には誇大理論家の思考の多くは、翻訳してみるといろいろな社会学の教科書にもでてくるような標準的なものであることが少なくない。」（チャールズ・ライト＝ミルズ『社会学的想像力』、鈴木広訳、紀伊国屋書店（新装版）一九九五年、四十頁）

「一個人が数個の喰ひ違つた集団に属するといふことは、総体としての社会の進化が、それらの集団の競合から発生するものであるが為めに外ならない。それが、有機的であるが為めに、機械的単純から離れた複雑さを持つているのである。個人は一個の「全人」であるが為めには、その有機的複雑さを、その生活に於て体験しなければならない。」（長谷川如是閑「階級戦争の倫理」（一九一九年）、『長谷川如是閑集』第三巻、岩波書店一九八九年、四頁）

目次

1. はじめに
2. 二十世紀風な議論
3. 個人主義という社会像
4. ジレンマや矛盾の反照性と自己産出
（以上136号）
5. 独創性の呪縛
6. 個人から離れる歴史学
7. 進歩史観の名残
8. 個人をめぐる別の可能性
（以上137号）
9. 「個人」と「主体」の形而上学
10. 裏切られる個人という筋書（プロット）
11. エリートの挫折という説明
12. 個人を超える危険社会（リスク・ソサエティ）

9. 「個人」と「主体」の形而上学

長年にわたる学問の伝統は、学問そのものを細かく細分化してきた。ただし、細分化がまりにも進行すると、多くの人々の理解を離れ、細分化それ自体が自己目的化してしまう。ただし、依然として多くの人々の思考に決定的な影響を与え続けている分類は、実学とそれ以外（虚学？）の区別である。実社会において直接に役立つ学問と、どうではない学問、あるいは実用性を度外視（無視）した学問の区別である。

「実学」を掲げる人々にとって、あるいは実用的であるがゆえに厳密な経験的実証が不可欠であると考える人々にとって、最も縁遠いところにある学問のあり方の代表は、形而上学である。形而上学は、人間の経験を越えた次元に、思弁によって独自の原理を打ちたてよ

うとする。それはすべてを超越し(ているとされており)、超越しているがゆえに二つに一つの選択肢しか提供できない。一つはすべてを受け入れることであり、もう一つはすべてを拒絶することである。だれでも接近することができる論証の手立て（経験による検証、確固とした歴史上事実、あるいは実験）を拒否した次元の議論である以上、思弁以外の選択肢は原理的には不可能になる。検証可能な根拠によって批判することができないからである。今日の常識に沿っていえば、形而上学は、宗教や芸術の領域の問題であるということになっている。

そして、「実学」を標榜する人々は、形而上学――宗教や芸術――を極力排除することによって、科学の確実性や信頼性を実現しようとしてきた。雲をつかむような話に熱をあげるよりも、いまここにある現実に全力で取り組むのだ！といえば、憤る人物は多くないだろう。現に、少なくとも日本の学界にあっては、「実学」を拒絶した人々の多くが過去の学説史の細かな知識にはまりこんだり、いわゆる「ポストモダン」の無駄なおしゃべりに時を費やした結果、「実学」の価値が以前よりも高まっている。実用性を拒否した「ポストモダン」の信奉者たちの一部は、「学問など無意味だ！」と自信満々に主張する。その昔、自分達が熱心に主張していた「大きな物語」が、冷戦終結で崩壊してしまったのだから、それ以外の知的営為もすべて無意味であると感じられるのは無理もないことだったのかもしれない。何もかも嫌になってしまった気分を、「学問」全体にぶつけたくなってしまったわけである。本来ならば深刻な問題として受け止めるべき内容を、らちのあかない無駄なおしゃべりでごまかしてしまう。以前の自分たちの言動を現下の現実と突き合わせて、「どうなんだ？」と問われれば、とてもまともには答えられない人々が、意味不明な言葉を多用したいい加減なおしゃべりでごまかすのである。当人たちの立場に立てば、やむにやまれぬ状況だったともいえよう。狭い学者の世界だけを考えるならば、ごく自然な対応だったといえるのかもしれない。

ただし、広範な社会問題として「ポストモダン」を捉えると、もっと根本的な問題に直面することになる。それは、日常的な社会生活を送る人々にとっての「学問」の位置づけをめぐる問題である。「ポストモダン」の浮ついた流行は、実はこの分野に大きな傷跡を残していた。それは冷戦時代に特定のイデオロギーを信じていた学者や思想家たちが、自分たちの巻き添えにする形で「学問」や「思想」全般の信頼を貶めてしまったことにある。

このことは特定の分野の専門家ではない人々の立場になってみればすぐに理解できる。その分野に専門に取り組んできた学者が「学問」を指差して無意味だと主張するのだから、彼らがやっている学問は無意味で、たんなる趣味以上のものではないはずだ、と考えるのが自然だろう。結果、「学問」全体が不審の目で見られることになってしまう。特定の人々が勝手に作り出したイデオロギーが失墜したことで、それ以外の人々が取り組んでいる学問全体の信頼性が低下するというのは、考えてみれば不当な話である。ただし、「ポストモダン」が流行した時期には、この種の不当な話が権威ある「思想」として多くの読者の心をとらえていたのである。

社会の問題について真摯な態度で取り組む若い人々――学生――

が、そんな状況の下で、「実学」に向かっていくことはごく自然であったといえる。一方には、「学問なんて無意味だ！」といって難解な言葉を並べて愚にもつかないおしゃべりを続ける連中がおり、他方には、「これこそが現実だ！」と請合って日々課題に向かって精進する真面目な人々がいる。一方には絶望があり、他方には責任感がある。ごく普通の常識の持ち主で、後者を選ばない理由は、かなり特殊なものであるだろう。

ただし、「実学」とそれ以外という区別にもかかわらず、横断的に共有されている信念が存在することも忘れてはならない。それこそが本稿で問題にしてきた「個人」を中心に据える発想なのである。

社会学理論の分野で、「個人」を中軸に据えた理論構成の根強さは二十世紀が終わっても衰えるところを知らないように見える。「個人」、あるいは「主体」をめぐる信念は、一九六〇年代から七〇年代に猛威を振るった構造主義の攻撃にもよく耐え、むしろそれ以後は、不死鳥のようによみがえって社会学を支配している。すでに本稿で論じたように、「個人」は強固な専門科学の地位を確立しており、専門分野の内側に留まる限り、それ以外の可能性を探求する必要はなくなっている。[1] むしろ、あらゆる手段を用いて既存の原理を根拠づけることこそが最優先課題となってくる。近年の例を挙げれば、人種差別問題や民族問題を専門とするフランスの社会学者ミシェル・ヴィヴィオルカが書いている次の一文は目を見張るようである。一見込み入った議論なので多少長い引用をお許し願いたい。

「主体についての、政治的、社会的、文化的な諸理解は、社会の中に主体がいわば根づくことを保証している。実のところ、それらは主体を、他の行為者たちとの関係や役割によって、あるいは何らかの内容によって定義された行為者と見なしているのである。われわれがここで採用しようとする概念は、それとは違って、そのようなタイプのいかなる原理にも、つまり、政治的、社会的、文化的ないかなる原理にも依存しないものである。われわれにとっての主体は、参政権から生じるものでもなく、職場の長を前にして労働運動が形成された場合のような、社会的支配関係の中での異議申し立てから生じるのでもなく、それがいかなるものであれ共同体から生じるのでもない。われわれにとっての主体は、場合によっては起こりうる帰属の上流、行為の上流に位置し、ひとつの欲求であり、自分自身の存在を生み出す可能性としてある。主体化と呼びうるものを通して実現されることもあれば、そうならないこともあるのは、自己の自己への関係、目標、潜在能力である。ドイツの社会学者ハンス・ヨアスの表現によれば、主体とは、「人間として行動することを生み出す性質」のことであり、個人として自己を作り上げる可能性である。すなわち、自己の選択を表明することのできる、したがって、経済、共同体、テクノロジー、政治等のいかなる領域においてであろうと支配的な論理に抵抗することのできる、他と異なる存在として自己を作り上げる可能性なのである。言い換えれば、主体とはまず第一に、意味の原理として自分自身を作り上げ、意味を自由に生み出すことを自分自身に課し、自分自身の軌跡を作り出す能力なのである。」（ミシェル・ヴィヴィオルカ『暴力』、田川光照訳、新評論二〇〇七年（原著

二〇〇四年)、二七二頁)[2]

簡単にまとめてしまえば、「個人からなる主体は、政治や社会や文化とは無関係な次元で超越的に存在する」ということになるだろう。政治学者は、主体相互の力関係から主体のあり方を探り、社会学者や文化人類学者、あるいは様々な領域で「文化研究(カルチュラル・スタディーズ)」と呼ばれる研究手法を用いている人々は、多元的な社会関係や特定の集団に共有される文化の動態から、そこに埋め込まれた主体に接近しようとする。ところが、この著者は、こういった社会科学の常套手段を一旦放り出して、「個人」そのものに肉薄しようわけである。言い換えれば、この著者にとって「個人」や「主体」とは、社会科学が考え出した種々の概念装置とは無関係な存在なのである。それは、他者や環境といった「外部」がどうなろうとも、依然として「意欲する私」でありつづける。それはまさにデカルトの国フランスの知識人らしく、「考える私(コギト)」をすべての出発点に置こうとする。ある種の政治学者ならば、アリストテレスの言を引きながら、「政治的存在」である人間の、「人間として行動することを生み出す性質」とは、他者との力関係によってしか成り立たないのでは?と疑問を感じるだろう。また、大半の文化人類学者は、デカルトのように考えること自体もまた文化であり、別の文化に属する人々ならば、この種の問題に真剣にかかわることはないと請合うだろう。多くの社会学者もこの種の考えに基本的に賛成するだろうし、知識社会学の流儀を持ち出して、デカルトやヴィヴィオルカのような著者たちがどのような社会的要因によってこの種の「言説」を生産し、「イデオロギー」として共有できるのかを考えるのかもしれない。さらに、ある種のマルクス主義の立場に立つ人々ならば、「個人として自己を作り上げる可能性」などというものが、「持てる者」、あるいは経済的に恵まれた階級に属する人物の願いであり、貧困者にとって「他と異なる存在として自己を作り上げる可能性」などというものがいったいどんな意味を持つのか?と疑うに違いない。

ただし、著者ヴィヴィオルカは、この種の議論は百も承知で、それでもなお「個人として自己を作り上げる可能性」や「他と異なる存在として自己を作り上げる可能性」を強調する。ヴィヴィオルカの文章は、その込み入った表現それ自体でいろいろなことを示唆している。想定する批判が多種多様であればあるほど、それらを取り込んで表現は複雑になり、ある種の「翻訳」が必要になっていくものである。向かってくる見えない敵から「個人」や「主体」をあくまでも守り通そうとするならば、それだけの準備が必要なのであろう。ともかくも、誰がなんといおうと、ヴィヴィオルカにとって、「主体」や「個人」は不滅であり、最高の価値を持っているのだろう。それは、何らかの経験的な根拠によって検証されるような問題ではなくて、超越的な次元の問題である。いうならば、この著者は、二十一世紀の初頭にあって「主体」や「個人」の形而上学を再構築しようとしている。

少し目を転じると、この種の信念――超越論的信念、あるいは形而上学――は哲学の領域では珍しいものではない。珍しいどころか、デカルト以来の近代哲学の主流をなしてきたともいえる。むしろ、社会科学と呼ばれる思考がデカルト以来の哲学の主流に対して手を変え品を変えその弱点を指摘してきたとすらいえる。それは圧倒的

な伝統に対する異議申し立ての過程でもあった。ところがかなり長い期間にわたる異議申し立てにもかかわらず、哲学をはじめとした諸学問にあって「個人」や「主体」の支配的な地位は揺らいではいない。現にヴィヴィオルカのような著者が繰り返し登場しては、「個人」や「主体」の超越論や形而上学を再構築する。しかも、そのたびに議論は複雑になり、文章はますます難解になっていく。

まさに確固として揺らぐことのない支配である。現に、「個人」に終始する社会観や歴史観は、具体的な研究対象から「個人」を外しただけで消えてなくなるようなものではない。むしろ、個人を主題としない議論に「擬人法」が頻繁に用いられ、それが次第に議論全体を先導するといった形になっていくことの方が、「個人」という思考様式の強固さを雄弁に物語っているといえよう。現に、この一文を書いた瞬間に、「……の強固さを雄弁に物語っている」という言い方が、まさに擬人法的なレトリックを用いていることに、（やはり個人である筆者は）気づく。自分がそのように言う端から習慣化した擬人法というレトリックに足をすくわれそうになる。

ある種の人々は、このような形の思考を極端に嫌う。自分でいったことに自分で突っ込んでふざけて面白がっているだけであり、厳密な分析を行ったり、有意義な結論を出すことを避けている、というわけである。彼らが考える分析とは特定の「研究対象」をより綿密に概念化していく作業のことであり、有意義な結論とは、特定の「研究対象」を従来よりも少しでも自在に操作（コントロール）するための知識のことである。彼らは、研究者と研究対象が完全に分離していることを自明視する人々である。しかも、研究者は研究対象を一方的に操作（コントロール）できる、あるいは一方的に観察し、記述、説明できると考えている。[3] 彼らは、研究者と研究対象が入れ替わり、相互に作用し合う状況を受容れない。この種の相互作用や自己言及を受容れてしまうと、自らが年来行ってきた研究――学問、科学――の基盤が掘り崩されてしまうか、あるいは深刻な矛盾に突き当たってしまうことを自覚しているのかもしれない。

これに対して、相互作用や自己言及を積極的に容認するか、そうでなくともあえて拒否しない人々は、それらがもたらしてくれる豊穣さを知ることになる。とりわけ「人間」や人間が形作っている「社会」を研究する人々は、最も身近な研究対象が自分自身であることに気づく。自分自身、あるいは「自己」は、その気にさえなれば、交渉しなくとも、謝礼を払わなくとも、すぐに協力してくれる研究対象である。二十四時間、いつでも気の向いたときに協力を惜しまないのが「自己」である。

しかも、研究の途上で「自己」が次第に、あるいは劇的に変化するといった事件を、最も率直に、嘘偽りなく表明してくれるのも、「自己」である。研究は同時に自らの可能性の発見でもある。研究によって、自らが知らなかった新たな「自己」に直面する。もっと正確にいえば、研究によって、研究者の「自己」は今までとは異なったものに変化する。このように考えてくると、自己言及や相互作用という考えが決して未知のものではないことがわかってくる。それは、少なくとも日本社会において「修行」や「修練」という言葉で表現されてきた一連の行為過程につながるものである。そこでは「修行」や「修練」は、「学問」と密接不可分のものであった。つまり、

「学問」（その他の「道（みち）」）に志す人々は、「修行」や「修練」を経て特別な境地に到達する。その過程で、以前の古い「自己」は捨て去られ、新たな「自己」が到来、あるいは実現する。これは、明治以降の日本でいわゆる「東洋」と呼ばれる社会（インド以東のアジア世界）において共通して保持されてきた思考様式である。

ここにおいては、確固として不変な「個人」などというものは無意味ではないとしても、価値がそれほど高くない。むしろ、「修行」や「修練」を経ることが重視され、それらを経て劇的に変化し、以前とはまったく別ものとなり、凡人の境地を超えた次元に達した個人こそが、最も尊重される。この文化に属する人々は、特定の分野で名を成した人物が発する「一生が修行です」という言葉に感動するように教育されている。「修行」という言葉は、この種の文化圏では最高の価値に結びついているわけである。存在よりも過程が、属性よりも経験が評価される。はじめから「救世主」として生まれてきた個人よりも、「修行」を経て、「徳」を身につけ円満に成熟した「聖人君子」のほうが信頼される。「君子は豹変する」という名句は、このように解するならば意味深い。

ただし、「君子は豹変する」は、しばしば「自立した個人」を掲げる人々によって、「無責任」や「個の未確立」といった決まり文句で断罪されてきた。なにものにも増して大切な「個人」が「豹変」してしまったのでは、社会の座標軸を支える基準点が消失してしまうからだろうか。

代わって強調されるのが、例えば、以前から日本国内で各方面を賑わせた「自分探し」である。何らかの形の「本当の自分」というのがあって、それが一時的に見えなくなっているか、社会的な要因によって障害を受けている。見えなくなっている「本当の自分」を見つけ、「本当の自分」を妨げている障害物を取り除くか、あるいは障害物がないどこかの外国に逃れたならば、すべては解決するのだというわけである。また、それはしばしば現実の今ここにいる自己の現状を弁解する論理ともなる。不満だらけの今の自分は偽物であり、真実の自己はもっと別で、どこかに隠れているからこそ、それを探しつづけるのだということになる。

その根幹には「豹変する」ことをあくまでも拒否する価値観がある。「自立した個人」が絶対で、「個人」や「主体」の超越論を掲げる人々は、宿命的に理想とは異なった自分自身との間で何らかの折り合いをつけなければならない。順風満帆で誰もがうらやむような境遇にある人物でなければ、現実の不景気な自分そのものに直面せざるを得ないからである。それが正視に耐えないような代物であるならば、現状を「偽物」と断定して、「自分探し」の旅に出るか、あるいは現実に妥協して凡庸な自分に自足するか、あるいは絶望してしまうことになるが、絶望の彼方にある選択肢はそれほど多くはない。なぜなら、彼らには経験を経る過程で「豹変する」可能性がはじめから閉ざされてしまっているからである。この問題については、本稿の後の章で再び立ち入って論じることにする。

10．裏切られる個人という筋書（プロット）

「自立した個人」を掲げる人々は、過去の人間が置かれていた状況について特定の型の論法を生み出し、発展させてきた。彼らの課題

は、「過去」あるいは「歴史」が、各々の個人にとって決して思い通りにはならなかったのだという事実をなんとかして説明し、まず自分自身が納得することである。「自立した個人」にとって、歴史は克服すべき試練なのである。

このことは、同じく「主体（個人）」と「研究対象」を分離して考えてきた思考にあって、自然科学と人文・社会科学を分かつ分岐点であるということもできる。自然科学にあっては、「個人」は同時に研究者の「主体」でもあり、個人である研究者の主体が研究することができない研究対象は、はじめから除外されている。科学的研究の対象として「存在しない」とされるのである。研究者の主体が関与することで結果が変化するような「観察」や「実験」は、（精神病理を扱う特定の領域を除いて）自然科学にあっては許されないからである。このことは、例えば自然科学としての医学や生理学を考えてみればよい。研究者（医師）と研究対象（患者）の相互関係で実験値や計測値が大きく変わるような状態は、自然科学の研究者にとって悪夢のような状態である。彼らの科学が至上命題とする「法則」が成り立たないからである。

これに対して、人文社会科学にあっては、個人の思い通りにならないことは、むしろ普通のことである。最良の経済学者が予測しても、肝心の「経済」は裏切る。最も鋭敏な法学者が議論しても、法の抜け穴を見つける機会はいくらでも見つかる。政治学者の考えどおりにならないから現実の「政治」は研究するに値する。そして、文学や歴史叙述にあっては、魅力的な「個人」が思い通りにならない現実に直面することこそを主題とする。このことは少し考えてみればよくわかる。例えば、恵まれた環境に生まれ育ち、最良の教育を受け、親が経営する会社にそのまま就職し、自らの賢明な経営で会社を発展させ、代表的な大企業に育てあげ、晩年は慈善事業に精を出し、各国から勲章をもらう、といった人物の自叙伝や伝記を、仕事上の必要以外で読みたい人がどれだけいるだろうか。この種の素朴な成功物語が読者の興味をそそりにくいのは示唆的である。

文学作品の読者は、もっと起伏のある物語を期待する。貧乏のどん底から苦労や挫折を経験しながらはい上がり最後に成功を勝ち取る人物や、反対に、恵まれた状況から底辺まで没落していく人物、さらには栄枯盛衰を当人の意図に反して足早に通り過ぎていく人物こそが文学作品の主人公なのである。いうならば、個人が、自分の思い通りにならない「運命」に翻弄されることで文学は成立する。

同様のことは、広義の「歴史」についてもある程度当てはまる。現に、専門の歴史家による歴史叙述は独自の修辞法（レトリック）や筋書（プロット）を発展させてきた。たとえば、歴史的事例の説明をする場合に、過去の終結した事件を、過去にさかのぼって説明することがよくある。事件の結末を知っている著者が、それを知らない主人公や集団の意図を説明し、それが思い通りにならないで挫折したり、予想外の幸運によって大成功を収めたりする様子を説明していくわけである。専門の歴史家の仕事から目を転じて文字の領域を含めて考えれば一層明らかである。いわゆる「歴史小説」という分野の文学作品がその典型である。作者と読者は、まるで万能の神のように、事件の結末を知り尽くしており、登場する魅力的な「個人」たちが無知な被造物としての宿命に翻弄される様子に、一喜一

憂する。悲劇では、運命の不条理に身を滅ぼす魅力的な主人公の苦悩や絶望が、文学的な充実感を実現する。成功物語では、一人だけ何もかも知り尽くし、愚かな同時代人の妨害を見事にかいくぐり、ついでに運も味方につけて、関係者一同を幸せに導く爽快感が生まれる。もちろん、これらの混合形態も各種いろいろある。どれも「自立した個人」を信奉する人々の願いどおりに構成され、彼らの価値観を日々再確認していく。

ただし、この種の修辞法（レトリック）や筋書（プロット）は、歴史小説という文学作品だけのものではなくて、専門の歴史学者による歴史叙述にも、また歴史をめぐる思想的、理論的な省察においても愛用される。たとえば、フランクフルト学派の思想家フランツ・ノイマンはナチス・ドイツによるヨーロッパ諸国侵略の最中（一九四二―四四年）に次のように書いていた。

「強力すぎる国家機構に直面した無能な個人の不安こそが、多元論の原理を基礎づけていたのである。生活がますます複雑になり、国家から負わされる課題の数が増すにつれ、孤立化された個人は、自分が理解することも制御することもできない勢力に、自分が引き渡されることに対してますます抵抗するようになる。彼は独立した諸組織に加入する。これらの私的な諸団体に決定的な行政的任務をゆだねることによって、多元論者たちは次の二つのことを達成しようとした。即ち国家と個人との間のギャップに橋をかけること、および支配者と被支配者の間の民主主義的同一性を現実化することである。そしてまた、行政的任務を、互いに競争している諸団体に手渡すことによって、極大の効果をあげようとした。」（フランツ・ノイマン『ビヒモス　ナチズムの構造と実際』、岡本友孝他訳、みすず書房一九六三年（原書一九四二、一九四四年、十八頁）

ノイマンの『ビヒモス』の魅力は、一九四五年のナチス・ドイツの崩壊を見る前に「ナチズム」の成立原因や伸張原因を、歴史哲学的に論じているところにある。もちろん、ナチス・ドイツに勝利したソビエトがその後どうなったのかということも無関係に論じている。ノイマンによればナチズムの成立の遠因は、強力な国家権力に直面した個人の不安にある。あまりにも強化された国家権力は個人に無力感を与え、無力感にさいなまれた諸個人は、自ら各種の団体を形成して、国家の力に対抗するか、あるいは「国家と個人との間のギャップに橋をかける」ことを意図した。

今日の視点からすれば、ヒトラー政権成立前夜のワイマール共和国が「強力すぎる国家機構」を保持していたのかどうかは議論があるところだろう。ただし、マックス・ウェーバーも強調していた「官僚制」の強大化が、「強力すぎる国家機構」を知識人たちに想起させていたことは間違いない。ノイマンの考えでは、ブルジョワジーと彼らが信奉する「個人主義的自由主義」は、当時無数に生まれ互いに競合関係にあった種々の政治勢力によって「強力すぎる国家機構」に対抗しようとした。

「かくして多元論は国家絶対主義に対する個人主義的自由主義の解答なのである。だが不幸にしてそれは自らに課した課題を達成しはしない。ひとたび国家が全く別の社会機関になってしまい、その至上の強権を奪われてしまえば、共通の利害を具

体的に満足させることのできるのは、社会の中の支配的な独立社会諸団体の間の契約のみになるであろう。そのような契約が結ばれ尊重されるためには、かかわりあう社会諸団体の間に相互理解のための何らかの基本的な基盤が存在しなければならない――要するにその社会は基本的に調和的なものでなければならない。しかし、実際には社会は敵対的なものだから、多元論の教説は早晩崩れ去るであろう。すなわち一つの社会集団が主権を侵し取ってしまうか、さもなくば、もしもさまざまな諸集団が互いに麻痺せしめ合い中和し合うことになれば、国家の官僚制は全能になるであろう――いやかつてのどの時代よりも全能になるであろう、なぜなら、かつて孤立化された組織されざる諸個人を統御するに要したよりもはるかに強力な強制の手段が、強力な社会諸集団の統御のために必要になるからである。」

（フランツ・ノイマン同書、十八―十九頁）

ナチズムがいかに成立したのかという問いは二十世紀後半を通じて社会科学全般を巻き込んだ主要問題のひとつでもあった。時間の経過とともに、ヒトラーのナチズムだけではなくて、もっと広い範囲で同時期に成立した種々の全体主義がどうして成立し、どうしてあれほどの勢力を誇ったのかという問いに模様替えされる。ノイマンも属したフランクフルト学派は、この問題を代表する論客ぞろいでもあった。テオドール・アドルノやマックス・ホルクハイマーといった人物によって代表されるフランクフルト学派最大の問題こそが、「ナチズムの原因」だったからである。

彼らが行った議論は、「啓蒙の弁証法」という有名な著作のタイトルで要約することができる。これは毎度おなじみである。すなわち、カントが「人間がみずから招いた未成年の状態から抜けでること」と定義した啓蒙は、複雑な過程を経つつも、結果として「ナチズム」や「アウシュヴィッツ」をもたらしてしまった、というわけである。「文明」は「野蛮」の原因となり、多くの人々が「理性」と呼んで褒め称えてきた人間の能力が、最悪の犯罪をもたらす。カントのいう啓蒙は非の打ち所のない社会思想だが、啓蒙が実現に移される中で登場してきた大衆社会は、「ナチズム」や「アウシュヴィッツ」の直接の原因であった。当事者たちの意図とは別の結果、予想外の結果が登場し、当初の行為者たちが考えもしなかった事態が引き起こされる。まさにこれこそが彼らのいう「弁証法」なのである。

ここでいう「弁証法」は、行為する個人の意図を超えた現象を説明する原理として用いられている概念である。行為する個々人は自らが生きる社会に行き渡っている既存の価値観や常識に従っているに過ぎないが、それらの行為が無数に相互関係する中で、新たな価値や原理が次第に生み出されていく。これを近年色々な分野でしばしば用いられている言葉で言い表せば、「生成的理論（generative theory）」ということになるだろう。静態的な形で今ここにある存在を究明するのではなく、多様な関係性の中で生成してくる新たな価値や原理こそが重要なのだというわけである。

ただし、この種の議論の基礎には、ひとつの筋書（プロット）があることを忘れてはならない。筋書とは、一言でいえば、「裏切られる個人」である。それは、哲学や社会科学だけではなく、文字によって表現されるあらゆる領域に行き渡っている物語（ナラティヴ）の型であるということもで

きる。つまり、特定の個人が自らの意思によって何らかの行為を行うのだが、行為の結果は決して当人の意図のとおりではない。決まって予想外の結果が起こり、当人は困惑し、種々の困難が起こり、裏切られてしまう。そして、著者の意図に沿った説明が登場して物語が完結する。ちなみにノイマンの本の主人公は、個人主義的自由主義（を信奉していたブルジョワジー）である。彼らは個人の自由を探求し、国家による束縛を避けるために種々の組織を作る。ところがこうして作られた組織が互いに自分たちの利益を極大化しようとすると、大きくなった諸集団、諸組織を統御する力も強大化してしまう。個人主義者や自由主義者が個人の自由を確保しようとすればするほど個人の自由を束縛する権力も強大化するというわけである。結果は怪獣「ビヒモス」による独裁支配。ホッブスの「リヴァイアサン」以来の権力怪獣が、再び自由を求める自由主義ブルジョワジーに襲いかかる。

ただし、この種の物語には決まってひとつの約束事が確保されている。それは、予想外の結果に苦悩する主人公たちとは無関係な地点に、ノイマンのような著者が立っていることである。「弁証法」と呼ぼうと、「生成論」と言い換えようと、すべてを見通している著者自身は、弁証法的運動の外部におり、生成などしなくても最初から完成してしまっているかのようである。つまり、自由主義や個人主義、さらにはそれらを信奉するブルジョワジーなどは、何をやってもどうせ行き詰まるのであり、ナチズムはその一例に過ぎないといった理解である。これに対して、すべてを見通した超人のような存在が、この種の物語を描き出す著者たちなのである。ワイマール時代に個人主義的自由主義を信奉し、結果としてナチズムに巻き込まれていった人々と、ノイマンの間には、何か特別な質的相違があるのだろうか。

ただし、本稿の課題はこの種の著者たちの超能力や神通力を疑うことではない。むしろ重要なことは、なぜこの種の議論がいかがわしいものになってしまうのかということである。それは、この種の議論が、同様な「個人」であるはずの主人公（＝個人主義的自由主義を信奉する人々）と著者（＝ノイマン）の間の関係が一方的であり、しかも著者は事件が終わった後の「後知恵」によって歴史上の人物（＝個人主義的自由主義を信奉する人々）を裁断しているからである。結果が明らかになった過去（歴史）について万能気取りで論じるのは愉快である。簡単にいえば、競馬や株式投資で失敗した人物について、後から「見通しが甘い」だの、「自分の能力を過信していた」だのといった論評をすることは難しいことではないからである。

ここまで考えてきた後で、先のノイマンの文章を読み返してみると失笑を覚える読者もいるだろう。損をしようと思って馬券や株式を買う人物はいない。自ら自由を失いたいと願う自由主義者もいない。それを後になって、あたかも自分だけは特別な存在なのだ、すべてはお見通しだ、といった調子で論評することはあまり自慢のできることではないだろう。ナチズムの残虐を逃れて亡命した同時代の当事者であったとしても例外ではない。後知恵ではなくて、「あの時、あなたはどう考えていたのですか？　何をしていたのですか？」と尋ねたくなってくる。もちろんこの種の著者たちは、こういった

質問にはなかなか答えてくれないものである。

この種のいかがわしさは、少し視点を変えて考えてみると鮮明になる。つまり、過去の多種多様な「個人主義的自由主義」やそのおびただしい数の信奉者たちを一括りにし、それを「個人」の人称で語り、同じく「個人」として権力や「国家の官僚制」を対立させ、前者の愚かさや後者の狡知を強調している。その上、「個人主義的自由主義」が信じる調和的な社会などというのは夢物語で、社会というのはあくまで敵対的なものなのだという断定が登場する。この敵対的社会像というのも、「個人」を出発点とする社会観にとっては毎度おなじみのものである。

ノイマンの厳かな物言いは難解な思考を暗示するが、少なくとも議論の仕組みは単純である。裁く行司は、もちろんこちらも「個人」である著者ノイマンである。行司はいつまでたっても行司のままで、相撲は取らない。しかも、この行司は勝負を判定するだけではなくて、敗北者側の敗因についてまで詳しく論評してくれる。その結果、多くの読者は自分の考えを力説する著者ノイマンの「分析」に無理やり納得させられることになる。著者自身は、まさに万能者の役回りであり、この種の万能振りを見せつけられると、今現在の生活に真面目に取り組むのがばかばかしくなってくるくらいである。今現在に真剣に取り組んでいても、後の時代になれば、きっとこの種の著者が自作の「弁証法」を当てはめて、今日の人々の愚かさや無能力ぶりを「分析」してくれるに違いない。

もちろん、これこそが後知恵としての歴史的思考の欠陥である。多少学術的な言葉を使うならば、「歴史主義の貧困」といえばよい。つまり、今現在の自分の思考様式に過去の事例を勝手に当てはめ、過去を断罪し、自分自身の正当性を確保しているだけだからである。遡及論理という言葉でいえば十分だろう。現に、この種の著者に、今現在の課題について「では、あなたはどうしますか？」と問うならば、万能の超能力者は一瞬にしてどこにでもいる普通の「個人」でしかなくなってしまう。馬券も株式も、事前に買わなければ無意味な結果論や遡及論理でしかないからである。しかもその上、この種の万能者は、自分自身が古くなるとさらに惨めな姿をさらす。過去の人間の愚かさをあざ笑う人間が、万能の原理であると信じている基準そのものが古くなってしまうからである。そのみすぼらしさは、歴史において自らの現実に立ち向かった人々――倒産した会社に投資した人間や、外れた馬券を買った人々、他――よりもなおいっそう見劣りがする。[4]

「裏切られる個人」という筋書は、もちろんノイマンだけのものではない。むしろ、過去あるいは「歴史」をめぐって何らかの社会科学的な分析を行おうとする著者たちが愛用してきた方法であるといえる。小は、ギャンブルや株式投資で身を滅ぼした個人についての説明から、大は、ヒトラーによる権力奪取やヨーロッパ侵略に至るまで、共通して用いられてきた。多くの読者を想定した雑誌記事や「ビジネス書」から、ごく少数の読者のための専門学術書まで、また、平明な書き方のベストセラーから難解な哲学書まで、基本となる筋書の点では共通している。

11．エリートの挫折という説明

「裏切られる個人」という筋書は、いわゆる「歴史における個人の役割」という古くからの主題でも愛用される。そこでは印象的な個人が主役を引き受け、歴史に決定的な影響を及ぼす。ただし、自分の思い通りに歴史を操作できるわけではない。とりわけ誰もが知っている歴史上の災難や失敗、敗戦を扱う場合はなおさらである。もちろんノイマンが論じたナチズムの勃興もその種の事例であった。

例えば、アメリカのジャーナリスト、デイヴィッド・ハルバースタムの『ベスト&ブライテスト』は、この点で見事な実例を提供してくれている。もっとも、「実例」というのは二重の意味を含んでいる。一つは、ハルバースタムが本のなかで登場させている実例のことであり、もう一つは、ハルバースタムの本それ自体が特定の型の議論を踏襲しているという意味である。

「それは、輝かしい時代だった。文字通り新しい血がポストを埋めつくしていた。積極的な独特のスタイルをもち、自身のほどを示しながら、彼らはアメリカを再び前進させようとしていた。彼らは聡明で、力強い人びとだ、残忍でも無情でもない、ただ拱手傍観することのできない行動派なのだ、と人びとは思った。

いまや座して待つ時ではない。歴史はそのような贅沢を許さない。傍観しているうちに、流れは目の前を通り過ぎてしまう。だれもがワシントンに向かって歩みはじめていた。東海岸の大学や政治クラブは言うに及ばず、あらゆる所で、超一流の人物がワシントンに向かっている、という噂が急速に広がっていった。これからは様子が変わる。決断と実行の時代が来る。まさに見ものだ。挑戦が待ちうけているのだ。

当時の超一流の人物たちは、自分達がその挑戦を受けて立つ力のあることをいささかも疑っていなかった。ジャック・ケネディの選挙演説の一節が、このことを裏書していた。ニューハンプシャーの厳冬の中ではじまった予備選挙から、彼は繰り返し繰り返し、その演説をロバート・フロストの詩の一節を引用して、締めくくっていた。「私には守るべき約束がある。眠りにつく前に何マイルも歩まねばならない」。歴史が彼らを、われわれを呼び求めているのだ。手をこまねいている暇はない。

そこには、アメリカが神々の栄光に輝く偉大な時代に入りつつあるかの感があった。頭脳と英知が偉大な力の前に召し出され、ともに栄えるべき共通の目標を定めようとしていた。アイゼンハワー時代に時折ホワイトハウスを訪れ、リーダーシップの欠如を嘆いていたロバート・フロストは、このことを鋭く感じとっていた。就任式で彼は、偉大な新たなる黄金の時代の到来を告げた。さらに彼は、新大統領にハーバードの伝統よりむしろアイルランドの伝統に生きるように促した。アメリカは変わっていくのだ、アイゼンハワー時代の疲れて無気力な商工会議所的雰囲気から、新しい時代の最良にして聡明な英知へと、政府の担い手が移ってゆくのだというあの気負い、全国津々浦々に、少なくとも知的アメリカのいたるところに広がっていったあの興奮は、今日、はるか昔の思い出になってしまった。」

（デイヴィッド・ハルバースタム『ベスト&ブライテスト』上、朝日文庫一九九九年（原著初版一九七二年）、九六―九七頁）

ハルバースタムの名作『ベスト&ブライテスト』は、この著者の名声を決定付け、二十世紀後半のアメリカ政治に対する「ご意見番」としての地位を確立した。読者の心をつかんで話さない話題の展開に、魅力的な個人をまったく魅力的に描き出す筆力は、明確な政治的主張とあいまって、この国の一つの側面を代表する。この本が扱うのは、ケネディ政権初期（一九六一年～）に活躍した「最良で、最も賢明な（best & brightest）」な人々（個人たち）が、なぜ愚かなベトナム戦争の泥沼にアメリカ国家を引きずり込んでしまったのか、という疑問である。最も優れた人材が政権を担当したならば、最も優れた政治が行なわれるはずだというのが普通の理解だろう。ところが、ワシントンに向かった「超一流の人物」が最良の選択と考えた政策が「ベトナム戦争」であった。

その結果は、ハルバースタムの読者ならば誰でも知っている。「最良で、最も賢明な」人々が行なった政策の、最悪で、最も愚かな帰結であった。超大国アメリカの財政を困窮させるほどの膨大な国家予算が費やされ、万の単位のアメリカ人の若者の生命が失われ、同盟国である西ヨーロッパや日本国内の世論が離反し、結果は何の成果も得られない惨めな「敗北」であった。これ以上ないくらいの犠牲を強いられ、結果は、これ以上ないくらい最悪であった。まさに踏んだり蹴ったりである。

「最良で、最も賢明な」人々を主人公とするハルバースタムがまず第一に挙げる人物は、マクジョージ・バンディ（一九一九―九六）である。東部の知的・政治的名門家庭（エスタブリッシュメント）に育ったバンディは、各教育機関の歴史に残る優等生であり、ハーバード大学の自信満々の学部長から、一九六一年、ケネディ政権の国家安全保障担当大統領補佐官として政界に転じ、ベトナム戦争を頂点とする同政権の軍事政策の立案に当った。まさに「ベスト&ブライテスト」としてこれ以上の人物は見当たらない。

「マッカーシー旋風のさなかアチソン[5]が攻撃されていた頃、バンディは「私は、アメリカの国務長官が党派的な議論の対象になったことのない家庭に育った」と語ったことがある。何が国家のために正しく、何が間違っているかを知っている、と確信しているところがエスタブリッシュメントの特徴なのである。とりわけバンディの場合、この傾向が強かった。それはたたかも、バンディの才能と国家の能力とが渾然一体となり、彼の運命と国家の運命が期を一にし、彼の自己利益はすなわち公の利益である、という確信から来るかのようであった。自らが道義的に正しいという信念を、彼はためらいもなく他人に披瀝し、同時に権力に対する衝動的な、ほとんど裸のまま欲望をあからさまにするのであった。」（ハルバースタム同書、一三二―一三三頁）

そんな人も羨むエリート中のエリートが、最良といわれる頭脳を駆使して立案した政策の結果は、著者ハルバースタムでなくてもよく知られている。誰の目にも惨めな失敗があり、アメリカの政界は六〇～七〇年代の長いトンネルに入っていく。後から考えれば、同時代の人々に停滞や指導力の欠如を非難されていた五〇年代のアイゼ

ンハワー時代こそが「黄金時代」だったわけである。

誰もが羨む選良の惨めな失敗。それは、多くの読者の意識に潜んでいる嫉妬心をくすぐらないではおかない。ハルバースタムがバンディの前半生の経歴を華麗に描けば描くほど、その失敗との落差が印象付けられる。一九六六年に政界を去った後のバンディの後半生は地味なもので、フォード財団に十数年ほど務めた後、ニューヨーク大学で歴史学を教えた。いうならば三十年にわたる長い余生である。

ハルバースタムの名作はその手際があまりにも鮮やかであることによって一種不快な読後感を伴う。この著者は、歴史学者ではなくて、新聞記者の手法で歴史を「報じて」いるからである。刻々と変化していく政界の動きを報じる新聞記者は、自分たちの政治的信念に基づいて近未来に対する予測を交えて記事を書く。そこでは愚かだと思う政治家の醜態を口を極めて罵ることもありうる。敵対勢力に向かって挑発することもあるだろう。当然のことで、同時代の新聞報道は、それ自体が政治的行為の一端を成しているからである。そして、どんどん進行していく事態は、過去の報道など忘れた地点で動いている。進行する今現在の現実に直面している限り、政治家と新聞記者との関係は対等である。新聞記者の方が見通しの甘さや過去の偏向を責められることもあれば、愚弄されていた地味な政治家が後には再評価されるといった事態もありうる。「それは歴史が決めることである」といえば陳腐な物言いになるが、確かにその通りである。ところが、ハルバースタムは同時代の新聞記事のような修辞を多用しながら、十年以上前に過ぎ去った過去を描いていく。[6] つまり、歴史叙述ではなくて、十年前の新聞を自分の立場に有利なように書き直すような仕事をしているのである。

この場合、登場する政治家たちは刑事裁判の被告の位置にあり、検事と弁護士と裁判官の役を全部独り占めにしたハルバースタムが裁判のすべてを取り仕切る。先にノイマンの議論について述べたことが、もっと明確な形で現われている。つまり、この種の議論は、株式やギャンブルで失敗した人々を後知恵で非難しているに過ぎないのである。

『ベスト&ブライテスト』は、過去を意図的に単純化しているともいえる。つまり、一方には「ベトナム戦争」に代表される現代史について万能者のような立場で裁断するハルバースタムという個人がおり、対するのは五里霧中といった現実に直面して次々と愚かな決断を下す、バンディに代表される傲慢なエリート政治家の個人である。勝負ははじめから決まっている。しかも、それが現下の政治的な意図をはらんでいる場合、単なる叙述の手法の問題では済まない。もちろん、『ベスト&ブライテスト』のような文献を学問的な認識手続きによって論評することには、それほど多くの意味はないだろう。

ただし、本稿の課題はハルバースタムの政治的な意図に論評を加えたり、論述方法のいかがわしさを非難することではない。重要なことは、この種の「個人」に終始する修辞や筋書(プロット)、そして論述方法が幅広い分野――難解な哲学書や理論書から、新聞記者(ジャーナリスト)の手になる報道的、政治的文書まで――で繰り返されているという事実である。むしろこの種の認識方法、論述方法、そして形而上学が、まさに通例として、無意識のうちに社会科学、とりわけ社会学理論のあり方

を決定付けてしまっていることを強調することが肝心なのである。

振り返れば、ハルバースタムの名作がまさに「名作」として読者に印象付けられる原因は、「個人」に終始する筋書によってあらゆる問題を説明するという手法にあった。簡単にいえば、「ベトナム戦争」のような大規模な史実が、少数の印象的なアメリカ人の「失敗」として説明される。この場合の課題は、登場する少数の人物をいかに魅力的、あるいは印象的に描写し、彼らの「失敗」を読者に納得させるのかということだけである。この結果、膨大な人員（人命）に資金を費やした戦争が、ワシントンの「宮廷政治」みたいな場ですべて説明されてしまっても、またベトナム人の登場人物が不在でも、多くの読者は気にすることがない。この「世界」では、特定の「個人」を通して理解できるもの以外は存在できないからである。

この場合の「個人」は、すべてに優先して存在する。先にフランスの社会学者ヴィヴィオルカの議論を見てきた。ヴィヴィオルカにとって「個人」とは、政治や社会や文化、とりわけ歴史とは無関係な次元で超越的に存在する。「個人」は、いかなる状況が生じようとも、絶対に「政治」や「文化」や「社会」よりも先行していなければならない。「政治」や「文化」や「社会」を作るのは「個人」であり、「政治」や「文化」や「社会」が「個人」を作り出すことはない。これは、具体的な事実によって検証される命題ではなくて、超越的な形而上学に属する。しかも高度に抽象的な論理を扱った哲学書だけではなく、現実の社会問題や政治を扱った実用書、あるいは本来は形而上学を排除してきたはずの「実学」に至るまで、疑うことなく共有されているのである。

12. 個人を超える危険・社会（リスク・ソサエティ）

本稿では、非常に不満足な形ではあるが、「個人」をめぐる形而上学的思考の実例について観察してきた。「個人」の形而上学は、単なる思弁的な議論だけに留まらず、具体的な事実を扱った文献にまで共有されている。それは、すでに論じたように、議論以前の前提であり、論証や事実検証以前の出発点、思想を超越した思想、哲学を超越した哲学――つまり、メタ思想、メタ哲学――の位置にある。

自ら自由であろうとした個人は裏切られ、万能感に満たされたエリートは失敗する。裏切られ予想外の結果に直面する個人や、挫折する個人は、それ自体として文学的な素材となりうる。「個人」に終始する著者と読者はここに共感し、不幸な運命に直面する主人公に同情したり、苦労知らずの優等生が挫折する様に密かな快感を覚えたりする。芸術や文学は、複雑な世界を独自な形で切り取って実感させ、また理解させてくれる。ただし、芸術や文学は万人に開かれた形を取らない。「わかる」人には充実した体験をもたらすが、それ以外の人々にとってはそうではない。現に、ハルバースタムのベストセラーを読む羽目になった晩年のマクジョージ・バンディには言いたいことがたくさんあったはずである。

ただし、問題は文学的な表現の世界に留まるものではない。むしろ、裏切られる個人や挫折する個人という型の思考様式自体が、社会科学、とりわけ社会学理論の中心的な課題となっていることの方が重要なのである。再度確認するならば、重要なのは主人公である「個人」が自分の思いのままに栄達、自己実現するのではなくて、裏

切られたり挫折したりすることである。言い換えれば、「社会」を「個人」の前に立ちはだかる強敵のように考えることこそがこの種の思考様式の要点なのである。

本稿ではすでに「権力」や「官僚制」といった概念をめぐる〝擬人法〟について少し考えてきた。ノイマンに登場する個人主義的自由主義者（ブルジョワジー）の前に立ちはだかるのは、怪物「ビヒモス」としてのナチズム社会である。ケネディ政権の「最良で、最も賢明な」な個人たちの前に立ちはだかるのは、国内外の情勢であり、各種の公共機関の官僚制であり、「軍産複合体」であり、各種の敵対勢力であり、種々の勢力の意向を受けたマスコミの批判であり、それらを総称した「社会」である。

「個人」は自らの思い通りに「社会」を操作（支配）したいと願い、そのために努力するのだが、うまくいかない。相手である「社会」は、実は「個人」よりも強力で、しかも「個人」の知力を超えている。経済的に恵まれた資本家でも、名門出身の学校秀才でも、「社会」を思い通りに操ることはできない。彼らの思い上がりは挫折し、高慢の鼻はへし折られ、「社会」は独自の論理で動いていく。こうしてみると、「社会」という名の「個人」は、少なくとも資本家や学校秀才を上回る能力の持ち主なのだろう。

それでは、これほど強力な「社会」というのは、一体何者なのだろうか？　それは、あらゆる人知を超えた全知全能の「個人」なのだろうか？　もしもそうならば、「社会」を研究対象とする社会科学は、いわゆる「神学」と似た課題を引き受けることになる。通常の人間の知性では計り知れない万能者の意図を仲介する預言者や聖人が、裏切られた「個人」や挫折した「個人」を救済するといった筋書である。その場合には、過去の偉大な預言者が残した福音を解釈することが、社会科学の使命になってしまうだろう。もちろん「社会」という概念のこの種の実体化は、すでに社会学理論の領域では古臭いものと見なされている。ただし、形を変えて、もっと複雑で巧妙な仕掛けを伴って何度も再登場してくる。

ここで問題にしたいのは、いわゆる「リスク社会（risk society/Risikogesellschaft）」論と呼ばれる議論である。本稿ではすでにアンソニー・ギデンズの議論に登場したリスク社会という概念について簡単に触れてきた。もちろん、ギデンズは代表者ではない。リスク社会論で一躍有名になったドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックはギデンズとの共著『再帰的近代化』（一九九四年）の中で次のように書いている。

「こうした二つの段階〔承前、工業社会（Industriegesellschaft）段階とその後の「リスク社会」段階〕を区分することで、「再帰的近代化」の概念を根本的な誤解から切り離すことができる。「再帰的近代化」という概念は（reflexive）という形容詞が示唆するような〈省察〉ではなく、（まず何よりも）〈自己との対決〉を暗に意味している。工業社会からリスク社会時代へのモダニティの移行は、潜在的副作用の様式にしたがって、近代化の自立したダイナミズムの結果、望まれてもいないし、気づかれないままに、強制的に生じていく。工業社会の確実性（進歩にたいする合意なり、生態系にたいする悪影響や危険要素の忘却）が、工業社会における人びとや制度の思考と行動を支配

しているゆえに、リスク社会という布置連関を生みだしてきたという言い方は、事実上不可能である。リスク社会は、みずからが及ぼす悪影響や危険要素を感知できない、自立した近代化過程の連続性のなかに出現していく。こうした過程は、工業社会の基礎を疑わしくさせ、最終的にはその基礎を破壊してしまうような脅威を、潜在的にも、また累積的にも生みだしていくのである。」（ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュ『再帰的近代化』、松尾精文他訳、而立書房一九九七年（原書一九九四年）、十七頁（ベックの執筆部分）。

ベックの議論は、マルクスの歴史哲学の流れを汲む発展段階論として理解することができるだろう。ベックによれば、農業社会（Agrargesellschaft）段階を脱した近代以降の社会は、次の段階として富の生産を課題（Logik der Reichtums-produktion）とする産業社会（工業社会 Industriegesellschaft）段階に移行し、それがさらにリスク生産（Logik der Risikoproduktion）の社会、すなわちリスク社会（Risikogesellschaft）段階へと移行しつつある。別の角度からいえば、人類の前に立ちはだかる難問は長年にわたって貧困であった。貧困とは誰もが欲しがる富の欠乏状態であり、それを解決するのは、何よりもまず富の生産であった。人々の需要を満たす富を量産し、それを適切に分配すれば、人類の苦悩は解消されるというのがその時代の社会科学の結論であった。ところが、富の生産が需要を超え、新たに需要を作り出すという社会――いわゆる「豊かな社会」（ガルブレイズ）、「高度消費社会」（ボードリヤール）――の段階に至ると、富の生産のための技術自体が人類社会に対する「危険（リスク）」の原因となりうる。ベックの言い方でいえば、貧困社会（Mangelgesellschaft）の分配闘争から危険社会の分配闘争に移行する。つまり、以前の社会では人々が欲しがる富の分配が主要課題だったのが、今日の社会では誰も欲しがらない危険（リスク）をどのように分配するのかということが課題になりつつある。

ベックが当初から念頭においているのは、原発事故に代表されるような科学技術によってもたらされる危険（リスク）である。一九八六年四月のチェルノブイリ原子力発電所事故は、ベックが住む当時の「西ドイツ」にも放射性廃棄物による汚染をもたらした。資本主義国であるドイツ連邦共和国には、経済的自由競争による勝者と敗者が日々再生産されていたが、「チェルノブイリ」に関しては全員が被害者である。それは逃げ場のない危険であり、勝者のない闘争であるともいえる。しかも、全員が原子力発電で生産された電気を使って日常生活を送っている。今日の生活で電力は不可欠である。不可欠な電力は、より効率的に生産されなければならない。そして、水力や石炭・石油火力による発電よりも効率のよい技術を求めた結果が原子力発電であり、その代償が「チェルノブイリ」であった。

しかも、放射能汚染は人間の五感で感知し得ないものでありながら、確実に人間の生命や健康を蝕む。ここで「個人」は、目に見えず、耳に聞えず、触ることも味わうこともできず、臭いもない脅威と直面しなければならない。自ら感知できない脅威をかろうじて知ることができる手立ては、原子力を開発したのと同じ科学技術でしかない。「個人」は自分が危険にさらされているのかどうかを、科学技術の専門家に尋ねなければならない。皮肉なことに、この種の専

門家は「チェルノブイリ」を作り出した責任者たちの一員なのである。そして見知らぬ探知装置が登場し、専門家以外にはなかなか理解できない言葉で「被害」や「対策」が語られる。

こうして人間は、従来とは異なった意味で科学技術に全面的に依存するようになる。従来、科学技術への依存は「個人」の主体的な選択を辛うじて含んでいた。飛行機や自動車に乗らない生活は、不便であるとしても不可能ではない。抗生物質の投与を拒否して結核で死ぬことは、勧められないとしても、あくまで「個人」の判断である。その上、これらの選択は専門家に依存しなくてもできることである。ところが、「チェルノブイリ」は、すでに「個人」の判断を超えたところにある。その上、「事故が起こった」という事実は、あくまでもその筋の専門家が大手のメディアを通じて伝えたことであって、日常生活を送る多くの人々の判断ではない。専門的な知識がなければ、たとえチェルノブイリの事故現場に出くわしたとしても、単なる爆発事故現場にしか見えないだろう。写真でみても黒焦げになったコンクリート建造物が映っているだけである。製鉄所や火力発電所の火災と「チェルノブイリ」を区別できるのは、あくまでも特定の知識を学習した人々だけなのである。最も危険な「放射能」は、実際に健康被害を受けた後でなければ、人間の五感で検知できないからである。

ここにベックを含めた社会科学者にとっての決定的な困難がある。「チェルノブイリ」は社会学者にとって専門外の事柄なのである。彼らは報道されている「専門家の見解」を耳にして、そこに重大な危険が生じていることを知ったにすぎない。「大事故だ！」というテレビアナウンサーの説明や新聞記事で事情を事前に知っているから、黒焦げのコンクリート塊が映った不鮮明な写真の「意味」を理解しているだけである。その上、ドイツ国内の市民運動家がどんなに反対しても、国境の向こうから飛んでくる放射性物質は排除できない。当時はソビエト体制に由来するずさんな管理体制が強調されたが、一九七九年に起こったアメリカの「スリーマイル島原子力発電所事故」を覚えている人々はその種の説明では納得しなかった。ベックは自らの名を世界的に有名にした本の冒頭で次のように書いている。

「二十世紀は破局的な事件にはことかかない。例えば、二つの大戦、アウシュヴィッツ、長崎、ハリスバーク［スリーマイル島原子力発電所事故］とボパール［インドの化学肥料工場事故］[7]があった。それに今やチェルノブイリである。これだけ多くの破局的事件があると列挙するのも容易でない。そして、それぞれの事件がどのような歴史的意義をもっているか考えざるを得ない。人間が人間に与えてきた苦悩、困窮、暴力にあっては、今まで例外なく「他者」というカテゴリーが存在していた。すなわち、ユダヤ人、黒人、女性、難民、異端者、共産主義者などである。この他者が苦悩と困窮を強いられ彼らに暴力が振るわれてきたのは、垣根の中、収容所、住区、占領地帯という空間であった。他方では、表面的にはこの他者に相当しない人々もいる。彼らには、そのかげで安心して暮らせる壁と自分の空間が象徴的な形でも現実にも存在した。これらの壁や空間は今後さらに存在し続けるものである。しかし、それはチェルノブ

イリ以来実質的にはもはや存在しなくなったも同然である。それは「他者」の終焉であり、人間同士が相互に距離を保てるように高度に発展してきた社会の終焉であった。この事実は原子力汚染の結果はじめてわかったのである。貧困は排除することが可能であるが、原子力の危険は排除するわけにはいかない。排除しないという事態の中に、原子力時代の危険が文化や政治に対して持つ新しい形態の影響力がある。この危険の有する影響力は、現代における保護区や人間同士の間の区別を一切解消してしまう。」（ウルリッヒ・ベック『危険社会　新しい近代への道』、東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局一九九八年、一頁）

「共産主義者」による「異端者」への暴力が落ちている点が気になるが、見事な定式化である。ただし問題はこれだけに止まるものではない。ベックの文章に、当人にとっておそらく不本意な言葉を付け加えると、「他者の終焉」は同時に、社会科学の「他者」化でもあった。ここに今日の社会科学にとって最大の難問が登場する。今日、社会科学の問題は、「社会科学」の範囲内で理解できるものではないし、対応できるものでもない。このことは、とりわけ「広い視点」を強調してきた社会学にとって深刻な問題につながってくる。「チェルノブイリ」は社会学者の手の届かないところで起こった問題なのである。ベックの考える「リスク」とは、社会学者が日ごろ行なっている活動の無力化を含む。このことは、しばしば社会学者の野望を揶揄していわれる「社会学帝国主義」に対比して考えてみると意味深長であろう。何でも屋という調子で人文・社会科学の多様な領域をつまみ食いすることが得意な社会学者ですら、「チェルノブイリ」についてはお手上げである。一部の社会学者は自分こそが社会の番人であると自負してきたのだが、手に負えない難問に直面してしまった。

確かに「二つの大戦」や「アウシュヴィッツ」は、社会科学者の得意領域であった。ところが、「長崎」や「ボパール」、「ハリスバーク」となると、不得意な分野の問題が入り込んでくる。ただし、「長崎」や「ボパール」の場合は犠牲者の数の多さによって具体的な状況が把握できる。これに対して、「ハリスバーク」や「チェルノブイリ」については、不明なことが多すぎる。例えば、「チェルノブイリ」の犠牲者数は、専門家の計測方法によって数百から数十万まで変化する。その筋の専門家の言明によれば多くの被害者が出ているのは間違いないのかもしれないが、具体的な「個人」が、どこでどうしてどうなったのか？について問うならば、専門家以外には何一つ明らかではない。事態の深刻さについて大声をあげようにも、その根拠はすべて特定の分野の専門家によって提供されたものでしかない。

その上、科学技術の問題は問わないとしても、「チェルノブイリ」はマックス・ウェーバー以来の社会学者が守り通してきた「個人」を出発点とする社会像（個人主義という社会像）にとっても対処困難である。「チェルノブイリ」は個人の意図を超えているからである。仮にそれがテロリストによる破壊行動が原因であるならば、事件の重大さにもかかわらず、社会学的な説明は簡単である。テロリストの個人は自分（たち）の信じる目的のために合理的な方法を見つけ出し、テロを実行する。まさにウェーバー的な社会像である。

ところが、「チェルノブイリ」にはこの種の「主体」は存在しない。同原子力発電所の作業員は、意図せずに事故を起こしてしまった。原因は彼らの操作にあったとしても、彼らは事故を起こすことを意図して操作していたわけではない。もちろん、「ハリスバーク」「スリーマイル島」も同じである。しかも、特定の個人の行動だけが事故の原因と断言することも困難なのである。決定的な一点において何らかの行為を行なった「個人」がいたのは事実だろう。法律家ならば、特定の「個人」に帰されるべき重大な過失をまず最初に問題にするだろう。しかし、「チェルノブイリ」の被害の大きさは、巨大な組織の末端の作業員個人が背負えるような種類の重大さではない。また、現場で死んだ作業員に責任を全て押し付けても、社会的にも、政治的にも、経済的にも無意味である。しかも原子力発電所のような複雑な組織では、通常はその種の過誤を修正する別の個人がおり、過誤の修正は何重にも準備されているはずである。ところが「チェルノブイリ」や「ハリスバーク」の場合、複数の防止策を乗り越えて事故が起こっている。つまり、合理的に行動する主体による念入りな監視が行なわれていても、「個人」を超えた重大事故が現に起こってしまうのである。

「チェルノブイリ」において「個人」は副次的な要因でしかない。根本の原因は、二十世紀に発明された原子力発電が存在することにある。そして、それが国家の威信をかけた国策として各国の政府によって奨励される。その極端な事例がソビエト国家であった。「国家」や「権力」をめぐる議論は社会科学者にとっては古くからの得意分野なのだが、それは特定の「権力者」という個人や、先に論じたように、擬人法的な存在としての「国家」や「権力」、つまり、あたかも個人のように行動する「国家」や「権力」に狭く限定される。例えば、「チェルノブイリ」を、一九八五年三月に就任したばかりのミハイル・ゴルバチョフ、ソビエト連邦共産党書記長という個人から説明して何らかの有意義な論点が見つかるだろうか？　その他、当時のゴルバチョフの側近の誰かによって説明できるだろうか？　不可能である。もっといえば、現場の作業員や管理担当者から頂点のゴルバチョフまで、「チェルノブイリ」について主体的に原因を作った「個人」は存在しないのである。具体的な「責任者」としての個人は存在しない。この結果、当時の報道や論評は、擬人法による修辞世界に終始した。つまり、「ソビエト官僚制」だの「硬直した原子力行政」だの、「国家の威信としての核開発」だのといった主人公たちが、大勢登場しては非難の矢面に立たされていた。しばらくこの種の修辞世界に浸っていると、ついには「チェルノブイリ」そのものが悪の化身として人格を与えられてしまう。あまりにも結果が重大で被害が甚大であったために、あらゆる問題を「個人」に終始して考える習慣の人々は、どこかに悪の総元締めのような「個人」の存在を求めているのだろうか。ただし、それらは具体的な「個人」が見つからない巨大事故にあって「責任者」の身代わりをしているにすぎない。

「リスク」は、すでに「個人」を超えてしまっているのである。この点で、人類が長年取り組んできた「貧困」とベックのいう「リスク」は別物なのである。本当に解決するにせよ、見えないところに押し込めるにせよ、「貧困」はいろいろな形で排除できる。これに対

して原発事故で放出された放射性物質は排除できない。いうならば科学技術の進歩がもたらした新たな運命が人類の上に覆いかぶさっているといった印象である。このことは、ベックの議論をもう少し立ち入って観察していくと一層明らかになってくる。

ベックの議論を理解するには、「リスク」という言葉の多義性と、ベックが意図的に選んでいる意味づけについて確認しておかなければならない。この場合の「理解」というのは、この著者の主張をそのまま受容れて祖述することではなくて、ベックの議論の仕組みを明らかにすることである。

「リスク」という言葉を掲げた文献、とりわけ投資などの経済活動を論じる書物は、決まって二つの言葉の区別を強調する。すなわち、「リスク」と「危険（danger）」は別物であるということである。危険というのはまさに危険そのものであって、自らに危害を及ぼす事態であり、人間や組織による行為のことである。これに対して、リスクというのは特定の利益行為に随伴する危険の可能性のことである。「不確実性」という言葉で言い換えることもできる。つまり、「危険を冒すこと」というのは、何の見返りもなく自らを危険にさらすことを含む。これに対し、「リスクをとる」といのは、より多くの見返りを期待して不確実性を引き受けることである。例えば、弾丸が飛び交う戦場を交戦国の国民でない人間が訪ねることは、その人間が単なる物見遊山を意図しているだけならば危険でしかないが、特ダネを狙う戦場カメラマンにとってはリスクである。つまり、前者にとって戦場の体験は無益であっても、後者にとっては機会なのである。そして、決まって「ハイリスク・ハイリターン」と「ローリスク・ローリターン」の言葉の組み合わせが登場する。より多くの利得を得たければ、より多くの不確実性を引き受けなければならない。不確実性を受容れるのがいやならば、より少ない利得で我慢しなければならない。株式投資と定期預金の相違が毎度おなじみの実例である。

これに対してベックの用いる「リスク」は、はるかに「危険」という言葉に近い。紹介的な文章で、ベックの“Risikogesellschaft/Risk Society”を「危険社会」と訳した訳者を非難するような言辞が行なわれることがあるが、ベックのいう“Risiko/risk”は、今日の社会科学で通常用いられる「リスク」ではない。この点で訳者の「工夫」は決して間違いではない。ベックは、「チェルノブイリ」の危険は強調するが、原子力発電所を建設することによる利得については何も論じないからである。言い換えれば、通常の用法での「リスク」は、同時に同量の「利得」と「危険」を受取ることを意味するが、ベックの場合は、「危険」ばかりを引き受けることを意味する。

もちろんこの種の概念規定は、ベック自身の意図を反映しているはずである。「ハイリスク・ハイリターン」と「ローリスク・ローリターン」を組み合わせて論じる毎度の投資戦略論も、ベックにとっては織り込み済みだろう。それでもなお、この著者は「ハイリスク・ハイリターン」の、「ハイリスク」の部分のみを強調しようとする。なぜなのだろうか？　人類は、やはり「危険」に直面していかなければならないのだろうか。なぜ、バラ色の「ハイリターン」生活ではいけないのだろうか？　ここにベックの議論に非常に印象的な運命論的思考を見いだすことは不可能ではないだろう。運命とは、「個

人」の力を超えたところで動いている巨大な動態（ダイナミックス）のことである。

ベックの議論の特徴は、共著者ギデンズと比べると「個人」の扱いが変化しているところにある。ギデンズが基本的に「個人」に終始する理論構成を行なうのに対し、ベックは運命の前に無力に立ち尽くす「個人」を前面に出す。ギデンズの理論では、基本的に「個人」に終始して論じられない問題は理論として扱わない。それらの存在を否定はしないが、事実上無視する。これに対して、ベックは「個人」の外部に強力な力の存在を想定する。言い換えると、ギデンズはマックス・ウェーバー的な伝統に忠誠を守っているのに対し、ベックはマルクス的な「歴史の必然性」といった発想を受け継いでいる。つまり、ウェーバーは新カント派流の認識枠組みとして「個人」を約束事として提示し、そこから「理解」できる範囲で議論を組み立てることを「社会学」（「理解社会学」）と呼んだ。これに対して、マルクスはヘーゲル以来の全体論的な歴史哲学を出発点とする。ウェーバーにとって「歴史の必然性」などというのは「個人」からでは理解不可能な問題であるが、マルクスの後継者たちにとっては、（ウェーバー流の）「理解社会学」などというのは、無意味な約束事に彼らのいう「弁証法的思考」を縛りつける行為でしかない。

ウェーバーよりもマルクスの側に依拠するベックは、同様に「個人」に出発しながら、「個人」に終始するウェーバーとは異なって、「全体性」を問題にしようとするマルクスの発想を尊重しようとする。それは、単なる「個人」を超えた次元で、「社会」を論じようとする議論の伝統に属していることを意味する。ただし、ウェーバーもマルクスも、どちらも「個人」に出発している点では共通している。ウェーバー流の議論は、「個人」に終始する論理から外れる問題は、否定しないとしても無視することで理論を構築してきた。これに対し、マルクス流の議論に属する人々は、本来「個人」の次元とは無関係の問題までも無理やり個人の問題として論じようとしてきた。それが毎度繰り返されてきた擬人法である。マルクス主義者は、古くは、「労働者」と、その前に立ちはだかる「資本家」の両者を、「個人」として論じることで、善悪二元論の、理解容易で躍動的な社会像を実現してきた。悪役の「資本家」は、もちろん「国家」や「権力」、あるいは近年流行の「帝国」と言い換えてもそのまま使える。発想は基本的に同一だからである。具体的にいえば、マルクス主義者のレーニンが「帝国主義」と呼んだものの手の込んだ変形版が、ベックの「リスク」なのである。

ベックの議論はこの種の論理の内側では説得力のあるものである。ただし、視点を転じると別様に見えてくる。それは、この種の議論が多くの約束事の上にかろうじて成り立っているに過ぎないのだ、ということを考え合わせることである。ベックの場合も、やはり「個人」が出発点にあり、それが通例と同じく何らかの困難に陥る。原因は、リスク社会とベックが呼ぶ「社会」である。「個人」が「社会」に敗北するという毎度おなじみの型である。ここから二つの疑問が出てくる。一つは、ベックのいう「リスク社会」以前の社会で、「個人」は「社会」を自在に操っていたのか？という疑問である。そしてもう一つは、そもそもどんな社会にあっても、「個人」が広大で複雑な「社会」を自らの意思に従って操作するなどということは

そもそもありえないのではないのか？という疑問である。もちろん、これら二つの疑問は、同一の問題を言い換えているに過ぎない。すなわち、「個人」が「社会」に敗北するという型の議論をする人々は、自分（たち）で勝手に作った物語（筋書、課題）の内側で勝手に「敗北」を語っているに過ぎないのではないのか？　あるいは、「失敗」というのはあくまでも彼らが書いた文章の上での修辞（レトリック）でしかないのではないのかという疑問である。

自分（たち）が勝手に「社会を操作する個人」という前提を立てたこと自体が「失敗」の原因だったのではないか。「個人」にとって「社会」は、チェルノブイリ事故よりもはるか以前からすでに操作不能だったのであり、そのことを特別な事件に結び付けて大声で言い立てることは無意味だったのではないか。つまり、はじめから「社会を操作する個人」などという前提を立てなければ、問題そのものが成り立たなかったのではないか？ということである。

（つづく）

1　佐伯啓思が一九九三年の著書『「欲望」と資本主義』で面白いことを書いている。

「ひとつは「専門主義」の弊害である。つまりひとつの専門にとって望ましいことが常に社会全体、あるいは科学全体にとって望ましいとは限らないにもかかわらず、そのことを「専門」の中では問題視することができないということだ。原子物理学における進歩が人類全体にとってはきわめて危険な原子爆弾をもたらしたというのは、そのもっともわかりやすい例だ。近年の臓器移植技術の進歩が人間の生と死にとってゆゆしき問題を提起しているというのも、もうひとつの例であろう。」（佐伯啓思『「欲望」と資本主義』、講談社現代新書一九九三年、二十一―二十二頁）

佐伯が念頭においているのは、おそらく「官僚制」の問題であろう。ただし、「専門家」の組織にとって重要なのは、「官僚制」よりももっと広い範囲の「組織」そのものなのである。

2　ちなみに、ヴィヴィオルカは、同じ本の少し前のところで次のように書いている。

「思想界とくに哲学において、主体概念は多くの伝統と非常に多様な思潮に属している。さらに、時代によって、それが要請されることもあれば逆に排除されることもある。たとえば、社会科学は一九八〇年代末以来、世界中で、個人の主体を中心に据えたパースペクティブにますます重要性を与えているが、六〇年代から七〇年代にかけては、構造主義が、もっともラディカルな解釈において主体の諸構造を分離していたばかりか、構造によってすべてを説明し、主体を追い詰め、主体の死を宣言するまでに突き進んでいたのである。」（ヴィヴィオルカ同書、二七〇―二七一頁）

3　今田高俊は「モダン」（近代）をめぐる議論の中で次のように書いている。

「モダンの発想は、〈自己言及〉の問題を思考の世界から排除することで、認識主体と客体のあいだに一線を画し、主体の客体にたいする認識的優位を保ってきた。自己の経験が自分自身に立ち返ることを前提としない科学と技術は、主体による客体のあくなきコントロールを正当化する。けれども、この発想はナチズムや全体主義にたいする盾にはなりえなかったし、また東西陣営の冷戦の盾にもなりえていない。実際、コントロール思想と表裏一体をなす効率と競争の原理は、これまでヒューマニズム思想という、信仰と博愛の原理によってかろうじてバランスされてきたにすぎない。」（今田高俊『モダンの脱構築』、中公新書一九八七年、一八八―一八九頁）

一九八〇年代の社会学にあって、「モダン」の根本原理が「自己言及の排除」にあることをはっきりと明言している点で、今田の議論は、筆者の知る限り画期的である。この場合、今田が素朴に自明視している「ヒューマニズム（人文主義）」が、「信仰と博愛の原理」に留まるもの

ではなく、むしろキリスト教の信仰を乗り越えて「人間中心主義」を形成し、「コントロール思想」の根幹として（今田のいう）「モダン」の根本原理を成してきたのだという問題は、ここでは詳しく論じないことにする。より正確にいうならば、ヒューマニズムの人間中心主義には、「コントロール思想」と「コントロール思想」によってもたらされた人間疎外（非人間性）を非難する思想の両面が表裏一体になっているのである。

4　それは、文字という無時間的なメディア表現媒体を選んだ人間の宿命である。表現媒体（手段）として、文字を書くことを選んだ以上、ほんの十年前の文章が古臭くて読むに耐えなくなってしまう責任はすべて当人にある。この種の人々は、たえず変動していく政治的な関係――敵と味方の間の関係――に特化した表現を選んだのであり、表現の賞味期限が過ぎたならば、老醜をさらすのは自己責任である。その時の党派的な利益を得た以上、時が過ぎ去った後の陳腐化は不可避である。後の人々に「時代遅れだ！」と愚弄されたとしても、不満を述べる権利はない。

5　ディーン・アチソン（一八九三―一九七一）は、トルーマン政権で国務長官を務めた。いわゆる「封じ込め政策（Containment）」の責任者として一貫して反共主義的立場を保持したが、マッカーシズムが最高潮になった時期には積極的な攻撃を行なわない受身の姿勢であるとして非難された。

6　このことは、ナチスドイツによるヨーロッパ侵略の最中に書かれたノイマンの『ビヒモス』（一九四二―四四年）と異なっている。ハルバースタムとノイマンを比較して、何よりも興味をそそることは、学者のノイマンが通常ならばジャーナリストが扱う現下の問題を論じ、ジャーナリストのハルバースタムが、毎度学者が論じるような過去の問題を入念に論じていることである。この結果、ノイマンは学問的な表現による現状分析を行い、ハルバースタムは十年前の新聞記事を書き直す。ただし、両者とも依拠する方法は同じものなのである。

7　正しくは殺虫剤工場。アメリカの化学工業会社ユニオンカーバイドの子会社は、インドのマッディヤ・プラデーシュ州の州都ボパールの工場で、殺虫剤カルバリルを生産していた。殺虫剤カルバリルは、日本では稲作害虫のウンカ、ヨコバイ類の防除に使用され、各種の果樹害虫にも広く使われてきた。事故は一九八四年十二月三日の深夜に起こり、膨大な量のイソシアン酸メチル（ＭＩＣ）が流出し約二万人の死者を出した。ＭＩＣは、ホスゲンから製造されるカルバリル製造の反応中間体である。